

下平用彩著『診断学』

明治時代におけるベストセラーと思われる医学書*

谷津三雄** 石橋 肇** 清沢美智子**
金子守男** 渋谷幸男**

国立国会図書館蔵¹⁾、明治期刊行図書目録、第三巻の医学の項に記載されている診断学の成書には『応用診断学』（ヴェルネル著、棟方 隆、高橋伝吉訳、英蘭堂、明治31年10月刊）、『近世診断学』（橋本節斎著、南江堂、明治38年12月刊、同44年7月刊、増訂5版）、『実用診断学』（オット、ザイフェルト著、保利聯訳、丸善、南江堂、明治22年5月刊）、『素人診断学』（糸左近著、金刺芳流堂、明治39年11月刊）、『新纂診断学』（笠原光興、高田耕安編、明治24年4月刊）、『診断学』（下平用彩著、吐鳳堂、明治37年、増訂12版、同、明治41年刊）などがみられる。特に下平用彩著『診断学』は明治20年10月第1版で同40年10月23日、第14版が発行されていることから、当時としてはベストセラーの診断学の成書と思われる。そこで私蔵本のこの診断学書を資料とし、その内容、特に口腔診査法を中心に摘録し、歯学史研究の一端としたい。

下平用彩著『診断学』の内容

本書は前篇と後編の2冊よりなり、そのうち著者が蔵する前篇²⁾は増訂12版で明治37年1月22日発行、全540ページ、金1円90銭、後編³⁾は増訂14版で明治40年10月23日発行、全626ページ、金



図1

2円20銭である。（図1）

本書は明治20年10月（第1版）、同21年8月（第2版）、同22年4月（第3版）、同23年2月（第4版）、同26年7月（第5版）、同27年10月（第6版）、同30年5月（第7版）、同31年4月（第8版）、同32年11月（第9版）、同34年2月（第10版）、同35年9月（第11版）、同37年6月（第12版）、同39年8月（第13版）、同40年10月（第14

* “Diagnostics” written by Yohsai Shimodaira-
Best Seller in the Meiji era

** Mitsuo YATSU, Hajime ISHIBASHI, Michiko
KIYOSAWA, Morio KANEKO and Yukio
SHIBUTANI: Nihon University School of
Dentistry at Matsudo, Department of Anes-
thesiology 日本大学松戸歯学部麻酔学教室

圖六百第 圖四百第 圖三百第 圖二百第
 氏ツッアラア 器診聴附管膜鼓 器診聴耳兩 器診聴狀管
 器射注

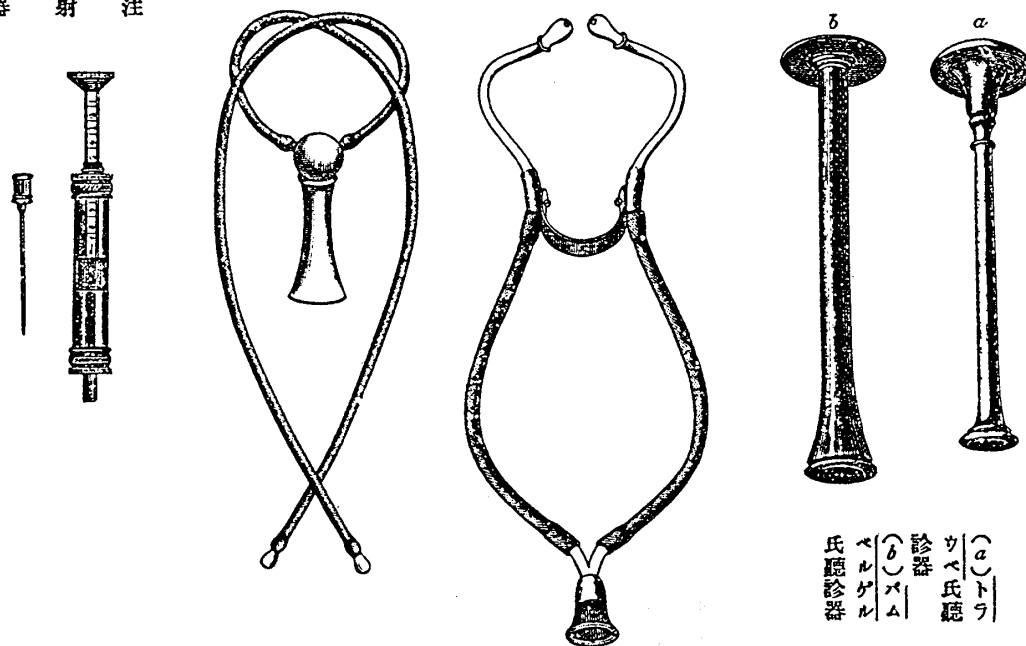


図 2

版)と20年間のうちに14回発行されたことになり、本書が当時の医学界に及ぼした影響ははかり知れないほど大きかったと思われる。

前篇の最初の3ページに「胸及腹内臓器前面及後面之局所解剖的位置」と題し、カラー摺りで2枚とその解説文が掲載されている。

第1版から第5版までの序言の記載はないが、第6版の序言に「本書ハ初メ主トシテ独逸国学士、ボートー、ショイベ氏ノ原著ニ拠リ訳纂セル者ナリ…昨年第5版ヲ上梓スルニ当テハ更ニ又主トシテ同国、博士、オスワルド、フキールオルト氏著ス所ノ内科臨床診断学ニ基キ痛ク増訂ヲ施シ且ハ八十有余個ノ精図ヲ増加シ全ク其面目ヲ一新シタリシガ第5版ハ亦大ニ読者ノ歡迎スル所ト為リ今ヤ吐鳳堂書庫亦早ク既ニ一本ノ残冊ヲモ余サザルニ至レリ…」からまさに明治年代におけるベストセラーの医学書であることが想像される。

また第11版(明治35年4月)の序言から血液に関する検査法や胃液及尿の検査など今日の臨床検査法が加えられたことを知る。

前篇は540ページで目次から前篇の内容をみると、緒論、一般診法、各部診法(呼吸器系診法、循環器系診法)とに大別されているが、痰の検査法、脈波計法、血液検査法など暫新的な内容になっている。

なお、今日の問診を尋問と呼び「小児ニ就イテハ歯牙ノ発生、歩行、言語…ヲ問ウコトヲ必要トス」と記されている。体温測定および体温計は検温法および検温器と呼び「検温器ハ独逸国ニ於ケルガ如ク摂氏(C)ノ検温器ナレトモ英・米両国ノ如キハ華氏(F)ノ検温器ヲ用ユルコト多シ」からドイツ医学を導入した日本は摂氏で読むようになったと思われる。尋常体温(平温)、体温昇騰(熱)、体温下降(低温)とあり、平温は $37.0 \sim 37.4^{\circ}\text{C}$ と記されており、当時は全体的に高体温であったのであろうか。

また聴診器はトラウベ氏型やバムベルゲル氏型の管状聴診器の他に今日とかわらない両耳聴診器がみられる。またブラワッツ氏注射器が胸膜試穿法として用いられている(図2)。

また脈拍数の測定には砂時計（砂漏）を使用していたが、「然レドモ 老練ノ医師ニ在テハ時計若クハ砂漏ヲ用キザルモ稍々精確ニ脈数ヲ算ユルコトヲ得ベシ」の記載はまさに今昔の感が深い。なお前篇には247図うち彩色図48が掲載されていることも特筆されてよい。

後編（篇ではなく編と記されている）は626ページよりなり目次からその内容を見ると消化器系診法、口腔検査法、食道検査法、胃ノ検査法、腸ノ検査法、肝臓ノ検査法、脾臓検査法、腹膜検査法、泌尿器系診法、生殖器系診法、神経系診察法の他に附録として応用診断法が掲載されている。なお後編には242図そのうち彩色53図が掲載されている。

口腔検査法

1～21ページにわたり記されており「先ヅ口腔粘膜ヲ視診スルニハ患者ヲシテ始メ口ヲ閉サシメ指ヲ以テ上下両口唇ヲ外方ニ翻転シ次デ開口セシメ圧舌子ヲ用キ注意シツツ頬粘膜ヲ齦齒ヨリ隔離セシム…」とある。また「口腔ノ検査ニ於テ肝要ナルハ（一）口唇（二）齒牙及齒齦（三）舌、（四）口腔粘膜（五）唾腺及唾液ノ検査及（六）口腔内容ノ顕微鏡的検査並ニ（七）軟口蓋及扁桃腺（八）咽頭及（九）口蓋及咽頭ノ疾患ニ於ケル顕微鏡的検査ナリトス」として不可欠条件についてふれている。

そのうち齒牙及齒齦については「其整備及状態（齲齒、齒石、被層、動揺等）ニ注意ス可シ」とあり、「齲齒ハ屢々糖尿病患者ニ睹ル所ナリ…上顎中門齒（永久齒）ノ下縁ニ半月状ノ欠陥ヲ呈スルモノハ遺伝梅毒ニ特有ノ徴ニシテ之レニ角膜実質炎及耳聾ノ二症ヲ合セテ特ニ晩發性遺伝梅毒ニ於ケル所謂ハッチンソン氏ノ三候ト為セリ…小兒ニ在テハ齒牙ノ發生及其交換ニ注意ス可シ是レ其發生ハ往々消化器ノ障害（反射的下痢）癲癇様發作（小兒急癇、齒座攣）或ハ又声門痙攣ヲ来ス者ナレバナリ」などの記載をみることができ、歯周疾患の記載はない。

また乳齒發生の順序と永久齒發生の順序が図示されているが、中切齒を内門齒、側切齒を外門

圖 十 六 百 二 第

序 順 ノ 生 發 齒 乳

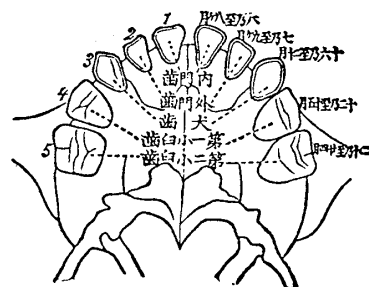


圖 一 十 六 百 二 第

序 順 ノ 生 發 齒 久 永

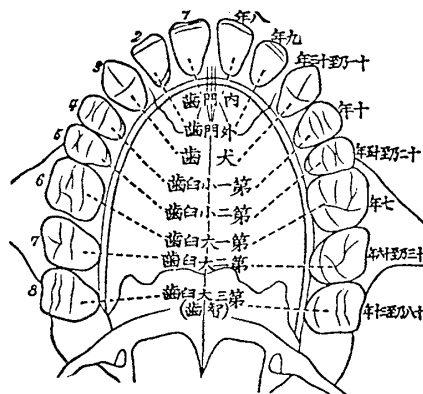


圖 3

齒，また第三大臼齒を智齒と記されている（図3）。

なお本書には口腔内容ノ顕微鏡的検査や口腔及咽頭ノ疾患ニ於ケル顕微鏡的検査が詳細に図解で説明されており、そのうち3個の彩色図のあることは特筆されてよく、顕微鏡が臨床上に使用されていたことを物語っている。

その他口臭について「齲齒、消化不良其他齒牙ノ不潔ナル輩ニ来ル者ニシテ重症患者ニ於テ粘稠ノ舌苔ヲ有スル者ニ来ル…肝要ナル者ヲ青酸、磷、亜酸個保兒、嘔囉彷彿ノ中毒ニ来ル臭氣トス…所謂菓臭（新鮮ノ林檎ニ酷似セル「あちえとん臭」トス、是レ往々糖尿病患者ニ於テ其昏睡前或ハ此期ニ来ル者ニシテ…」と糖尿病のアセトン臭を記載している。

附録応用診断法の項の消化器系諸病の中には口内炎、口峽炎、咽頭炎などが記されている。

考 証

本書の初刊が出版された明治20年10月から第14版の明治40年10月までの20年間の主な医事について中野操著⁴⁾『日本医事大年表』よりみると、明治20年5月19日博愛社を日本赤十字社と、また博愛社病院を赤十字社病院と改称したこと、また明治20年末医師統計によると、総計40,343人で、そのうち明治20年中に医術開業免許状下附者は総計835人あり、そのうち内務省試験及第者(歯科医14人を含む)367人と記されている。またこの年の2月26日にW.C. イーストレーキが53歳で死亡している。明治22年12月に「歯科医高山紀斎東京に高山歯科学院を設立し歯科学を教授す、之れ現在の東京歯科医専の前身にして系統的歯科教育の端緒なり」と東京歯科大学の前身高山歯科医学院の設立のことが記されている。明治23年4月1日～7日までは第1回日本医学会の開催されたことを、また明治26年4月4日～10日に第2回日本医学会が開催されたことが記されている。

明治33年12月に野口英世米国に赴く、また月日は不詳であるが血脇守之助、東京神田小川町に東京歯科医学院を開く。明治35年3月、東京医科大学に歯科学講座を新設し助教授石原久をして担任せしむ。同年4月2日～5日第1回日本連合医学会を開く。これが今日の日本医学会総会のはじまりであり、これより起算し本年4月4～6日に行われたのが第22回日本医学会総会である。明治36年11月、大日本歯科医学会創設せられる。之れを最初の歯科医学会とす。なお本年中に日時は不明であるが、石原久、帰朝して東京医科大学に歯科学を講じ且つ附属医院に於て歯科外来患者を診療す、次で大正年代に入り京都医専、慶応医大、九

州帝大、大阪医大、愛知医大等相次いで歯科講座を設置す。明治39年4月4日～7日に第2回日本連合医学会が開催される。5月法律第47号を以て医師法が發布せらる。歯科医師法も同時に公布さる。また明治26年に歯科攻究彙報、同28年に歯科医学叢談が刊行されたことなどが記されている。

結 び

下平用彩著『診断学』は明治20年10月に第1版が発行され、同40年10月に第14版が出版されるなど当時としてはベストセラーと思われる医学書であるが、なぜか中野操著『日本医事大年表』及び藤井尚久著『医学文化年表』にも記載されていない。なお中野操著によると下平用彩は明治23年、『列氏生殖器病学』、『ハーケ産科攬要』、同29年に『外科汎論』、同32年に『婦人科病学』など多くの医書を出版している。この下平用彩は金沢医学専門学校教授で大正12年2月23日に61歳で没しているので本書の初刊本を出版した明治20年は35歳になり最も頭のさえた35～45歳代の著書と思われる。

文 献

- 1) 国立国会図書館所蔵、明治期刊行図書目録第3巻、218-225、東京、国立国会図書館、1973年、1月巻。
- 2) 下平用彩著：増訂第12版、診断学、前編、東京、吐鳳堂、明治37年1月刊。
- 3) 下平用彩著：増訂第14版、診断学、後編、東京、吐鳳堂、明治40年10月刊。
- 4) 中野操著：増補日本医事大年表、223-254、京都、思文閣、昭和47年12月刊。
- 5) 藤井尚久編：医学文化年表、186-229、東京、医道の日本社、昭和52年5月刊。